

いぬはりに

vol.

14

Creator's voice ①

植田真 インタビュー

日々変化する季節の気配
その瞬間を表現したい

Creator's voice ②

コンノユキミ インタビュー

子どもたちの毎日は
キラキラ輝いたからもの



卒園記念特集

大切な証書だから、格調高く、味わい深く。

新学期用品特集

「ワンタッチえのぐ8色セット」を使って、
運動会の旗づくりにチャレンジ!

先生も園児も安心!

やわらかく割れにくいケースです。

子どもたちが心豊かで
健やかに育つ環境を

文化作品のある風景

かわいい少女がやさしく微笑む、
笑顔あふれる保育園

植田真 インタビュー

日々変化する季節の気配 その瞬間を表現したい

透明感のある自然風景や、愛らしい表情の動物、子どもたち、植田真さんの描き出す作品には、心にそっと寄り添うような、静かでやさしい世界が広がっています。さまざまな分野で、多彩に活躍する植田さんの発想の源とは？神戸のアトリエにおじゃまして、作品への想いを伺いました。

— 小さいころはどんな男の子でしたか？
「ぼくは静岡の天竜市で生まれ育ちました。野山を駆け回ったり、秘密基地を作ったりするのも好きでしたが、同じくらい絵を描くのも好きでした。夏になればセミやクワガタなどを捕まえては、それらの絵をよく描いていました。そういつた、子どもの頃に見ていた山や森、植物や虫などの故郷の風景は無意識に今の多くの作品に出てきていると思います」

— 「装丁」と呼ばれる本の表紙やブックカバーのデザイン、挿絵、絵本、広告など、幅広く活躍されていますが、作品の発想はどこから生まれるのでしょうか？
「たとえば装丁のときは、まず本を読み、その内容からインスピレーションを得ることが多いです。個展作品を描くときは、テーマを用意せず、白い紙の前に、自由に手を動かして描いています。最終的に

どのような絵ができるのか描きながら創っていく面白さがあります」

— 植田さんが作品にこめる想いとは？
「この絵は、どっという絵なんだろう？と、絵を見る人それぞれが感じたり、想像を巡らせる楽しさをなくさないように、あまり絵で説明しすぎないようにしています。また、季節の変わり目に窓を開けると、昨日までとはちがう風や気配を感じ、世界がガラッと変化して見えるようなことがあります。そんな瞬間をとらえ、表現したいと思っています」

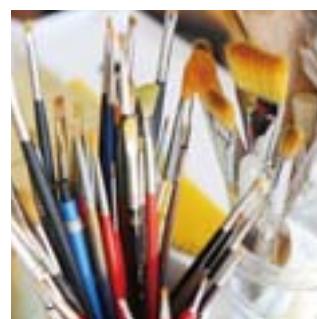
— 今回ジャクエツとのコラボレーションで手がけた『あゆみ』は、植田さんにとつてどのような作品ですか？
「子どもたちがひと月ごとに季節感を感じながら、絵のなかに入って冒険している気分になれるように、そんな思いをこめて制作しました。いちばん印象に残つ



植田さんのアトリエは、柔らかな日差しが心地よい、明るく開放的な空間。大きな窓からは、神戸の海や街並みも一望できます。



植田さんが描いた『あゆみ (ニューアート)』6月の原画(写真左)と実際のページ(上)。アジサイの葉やカタツムリ、傘などをモチーフに、梅雨の日も楽しく過ごせそうな、想像力がふくらむ作品。



植田 真

1973年静岡県生まれ。『イラストレーション』誌「ザ・チョイス」1998年度の大賞受賞。絵本、装丁、装画、挿絵、CDジャケット、広告など、幅広く活躍中。最近、長年暮らした東京から神戸に拠点を移したばかり。

ているのは、最初にイメージが浮かんだ6月です。あじさいの葉、傘、雨、かたつむりなど、ふだんはあまり描くことのないモチーフも多かったのですが、今回は園児さん向けということで、親しみやすい作品になるよう心がけました」

——画材は何を使っていますか？

「今回の『あゆみ』は、すべて色鉛筆です。ぼくににとって、色鉛筆やクレヨンはいい意味で気軽な画材。肩ひじ張らずに描けるんです」

——子どもたちが絵を描く時に、一言アドバイスをお願いします！

「まず、描きたいものをしっかり観察しましょう。虫でも花でも、よく見ているうちに、12色や24色の色鉛筆やクレヨンでは表せない色をしていることがわかるはず。それに気がつくのと、このピンク色を表現するには、どうすればいいのかな？と、色への意識も変わってくると思います」



植田さんが手がけた絵本。左から、「マーガレットとクリスマスのおくりもの」(あかね書房)、「スケッチブック」(ゴブリン書房)、「まじよのデイズ」(のら書房)



コンノユキミ インタビュー 子どもたちの毎日は キラキラ輝くたからもの



コンノさんの愛猫、ロシアンブルーのアーロ君が「ニャ〜」と出迎えてくれます

「絵のなかに入って一緒に遊んでみたい!」と思わずにはいられない、カラフルで楽しく、遊び心たっぷりの、コンノさんの絵の世界。

居心地のよい北欧風のアトリエをたずね、コンノさんの絵が生まれるエピソードを伺いました。



コンノさんが手がけた「あゆみ (デラックス)」4月の原画(左)と実際のページ(中)。子どもたち一人ひとりが物語の主人公になった気分で「今日はお花にしようかな」と毎日シールを貼っていくと、やがて一枚の絵が完成! みんなで見せ合うのも楽しそう!

——今回制作した『あゆみ』には、どんな思いがこめられているのでしょうか?

「テーマは季節の遊びです。花や葉っぱに触れたり、雨の日に傘をさして歩いたり。子どもたちが想像して、この世界の中でより自由に遊べるようにするために、すごく不思議な別世界ではなく、ほんのちよつと思議な身近な世界を描きました。『大きなお花の上に乗ったら楽しそう!』とか『雨粒の中に入ってみたいな』など、自分が主人公になった気分で空想の世界をどんどん広げ、楽しんでほしいと思います。

——コンノさんのお気に入りは、何月のページですか?

「3月と4月かな。3月はおもちゃがたくさん出てきてワクワクしますし、4月は色とりどりのカラフルなお花がいっぱいで、元気になる気がします」

——作品を描く手法を教えてください。

「絵を描くときはまず、鉛筆で下絵を描いてから、アクリル絵の具と筆を使って色をつけ、時間をかけてじっくり仕上げています」

——コンノさんの作品に登場する子どもたちは、かわいいただけでなく、とても表情豊かですね!

「私の作品作りのコンセプトは、『ドモのキラキラ★』です。子どもたちが、『ココロをキラキラ輝かせて毎日を過ごせませすように。そのキラキラをずっとずっと大切にできますように。そんな願いを込めて制作しています』

——小さいころはどんな女の子でしたか? 「自然いっぱいの山形県で生まれ育ちまし



コンノユキミ

1978年山形県生まれ。東京学芸大学美術科卒業。「ドモのキラキラ★」をコンセプトに、フリーのイラストレーターとして活動中。絵本・児童書の挿絵、テキスタイルデザイン・キャラクターデザインなどを手がける、注目の若手作家。

た。お絵かきはもちろん好きでしたが、外でかけまわって遊ぶのも大好きでした。私の作品には、木や花、葉っぱ、満天の星空など、自然をモチーフにしたものも多いのですが、これはきつと、自然いっぱいの山形の風景が原点になっていると思います」

——園で子どもたちが絵を描くときにこつするともつと素敵になるよ! というアドバイスをお願いします。

「私が作品を手がける時は、色にとってもこだわっています。絵を描こうとする時、自分がいちばん描きたいのは何か、それを中心に考えるのがおすすめです。たとえば、赤いリンゴを表現したいときは、背景は何色にすると、赤色が引き立つかな?と考えながら描くことで、色同士がケンカせず、きれいに描けると思っています」

——まもなく春が来たなら新学期。子どもたちと先生にメッセージをお願いします。

「毎日登園して、今日は何んなシールを貼ろうかな?と『あゆみ』を楽しみにしてくれたり、とてもうれしいです! 貼るだけじゃなく、シールにラクガキしちゃうのも楽しいですよ。私の作った『あゆみ』が、少しでもみんなの元気のきっかけになったらとてもうれしいです! 子どもたちも先生も、キラキラできる時間や気持ちを大切に、毎日を過ごしてほしいと思います」



コンノさんが装画を手がけた書籍。子どもたちのイキイキとした表情や楽しい冒険のようすが伝わってくる。左から『未来へむかう心が育つおはなし』(主婦の友社)、『いのちを感じる心が育つおはなし』(主婦の友社)

大切な証書だから、
格調高く、味わい深く。



卒園証書は、園児たちが人生で初めて受け取る成長の証。

「この園を巣立ったことを誇りに思ってもらいたい。」

そんな願いを込めて、新たな旅立ちのはなむけにふさわしい和紙の証書ホルダーをつくりました。

コンパクトな A5 サイズは
収納場所を選びません。



〈使用例〉

〈使用例〉※証書は別売にて承ります。



証書ホルダー 越前桜

A4
30.5×44.4cm 890円(税込)

A5
22×31.7cm 760円(税込)

※サイズは広げた状態です。

**おもいで表紙
A3越前桜**

42×30cm 770円(税込)
作品がバラバラにならない
ゴムバンドも付いています。

「越前桜シリーズ」は、
福井県の特産品である
越前和紙を貼り紙に
使用しています。



越前和紙の歴史探訪

清らかな水

と人情あふれる風土に育まれてきた越前和紙。その産地である越前

「五箇」の地は、ジャクエツ創業

の地福井県にあり、全国に

またある和紙産地のなかで

も、美濃紙、土佐和紙の産地とともに

三大産地のひとつに数えられています。発祥はなんと1500年前にさかのぼり、地元には次のような伝説が語り継がれています。

越前の地、岡太（おかもと）川に、あるとき忽然として美しいお姫様が現れました。「この村里は谷間にあって田畑が少なく、生計をたてるのはむずかしいであろう。しかし、こんなに清らかな水に恵まれている。紙を漉けばいい紙ができ、暮らしも楽になるであろう」と言われました。そして、自ら上衣を脱ぎ竿にかけ、紙漉ぎの技を教えたといわれています。



和紙産地風景



川上御前

里人は非常に喜び、お名前を尋ねると、「岡太川の川上に住むもの」と答えただけで消えてしまいました。その後里人は、この女神を川上御前（かわかみみづの）とあがめ奉り、岡太神社を建ててお祀りし、その教えに従い紙漉ぎの業を伝えて今日に至っているそうです。この川上御前は、いまでは、全国唯一の紙の神様である紙祖神として祀られています。



岡太・大瀧神社

薄く丈夫で水にも強い越前和紙は、室町時代から江戸時代にかけて、公家や武士階級の公用紙として

全国に広まり、「紙の王にふさわしい紙」と高く評されていました。日本最初の藩札とされる福井藩札（1661年）や、のちの丸岡藩札、大野藩札、そして明治政府による大政官札（1868年）にも、使われていたのは越前和紙です。



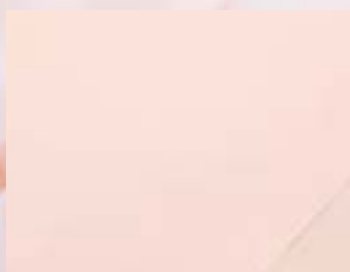
太政官札

そして、日本銀行が1885年に初めて発行した紙幣、大黒札にも、越前和紙職人が編み出した黒透かしを使った越前和紙が用いられました。越前和紙は、まさに日本の紙幣の歴史とともに歩んできたと言えます。さらに、書画用紙としても、横山大観、竹内栖鳳、平山郁夫、東山魁夷など日本画の巨匠たちに高く評価され、愛用されました。

こうして、広く認められた「正式の用紙」として、越前和紙はいまでも各種証券や卒業証書などによく使用されています。歴史の流れを振り返ってみると、越前和紙を証書ホルダーに使うことは、実は卒園式・卒業式という公式な場にふさわしい選択だったといえそうです。

〈資料提供〉福井県和紙工業協同組合 越前和紙の里 紙の文化博物館

「越前桜シリーズ」に使用した越前和紙の伝統的な加工



1 すき紙漉で淡いピンクに色付けされた和紙を使用します。



2 しろうもキラ（白雲母）のシルク印刷で桜柄を施します。パールのようにキラキラ輝く光沢がでて華やかになります。



3 揉み加工を施すことで、和紙の表面に凸凹ができ、味わいのある上品な風合いに仕上がります。



「ワンタッチえのぐ8色セット」を使って、
運動会の旗づくりにもチャレンジャー！
ワンタッチえのぐ8色セット

新製品の「ワンタッチえのぐ8色セット」を使って、緑園なえば保育園の年長さんたちが旗づくりに挑戦。みんな初めての体験にワクワクドキドキしながらも楽しそう。真剣に自分の世界に入り込む子、となりのお友達と見比べながら描いている子、いつまでもえのぐを混ぜ合わせている子などさまざまでした。完成した旗は、運動会で飾られ会場を彩りました。



簡単に開きました。
チューブも絞りやすくやわらか。



で、きつよ〜

えのぐセットには、これまで「外れたキャップが誰のかわからない」「開めたはずのキャップがちゃんと閉まらずに乾燥してしまった」「スライド紙ケースは園児にはしまいにくい」「パレットのえのぐが混ざってしまう」といった指摘がありました。そこで、園児たちが楽しく快適にお絵描きに集中でき、先生方も落ち着いて見守りや指導がしやすいえのぐセットをつくりました。

えのぐは、発色が良く伸びもスムーズです。基本の3原色（赤・青・黄）と無彩色の白黒の2色に、園児がよく使用する、緑・茶色・パールオレンジの8色を選定しました。例えば同じ海の色でもエメラルドグリーンであったりブルーであったり、ひとりひとりの表現は異なります。チューブから出したそのままの色で描くのも素敵ですが、色を混ぜ合わせることで園児たちの個性は「層きわだつて表れます。

えのぐチューブは、片手でワンタッチで開けられるキャップを採用。これでキャップ紛失の心配は少なくなり、ケース本体にはゴム掛けをつけたので、スライド紙ケースが不要となりました。えのぐや筆は、端を押すだけで持ち上がるピアノタッチ構造を採用し、取りやすくしました。パレットは、となりのえのぐと混ざりにくいように窪みを7mmと深めにしたほか、フチに凹みを設け筆置きとしました。これで、筆が転がり作品を汚してしまうことも少なくなりました。はないでしょうか？



VOICE

「園児たちひとりひとりがこのケースを使っています。フタは、作業時の小物入れにしたり、重ねて運んだりしてもずれないのがいいですね。」(保育士)

どうぐケースくま

23.8×32.9×高さ7cm 887円(税込)



柔軟性があるので割れにくいです。



園児が、ハサミでチョキチョキ切った折り紙をフタに入れました。



フタをびったり重ねて運べます。

プラスチック素材のケースを園で使用するとき、気になるのは「割れないか」「それで園児がケガをしないか」ということ。また、手の小さい園児でも開け閉めがしやすく持ちやすいこともポイントです。
そこで、通常のポリプロピレンをベースに、衝撃にも強く割れにくくなる樹脂を加えました。設計・金型製作・生産は、すべて日本国内で行っています。
フタの部分には、すべて丸みをもたせ、持ったときに手が痛くないように配慮しました。どうぐケースについては、中に入っているものがわかりやすいように、フタを半透明にしています。
また、どうぐケースのフタは収納するための単なる部品としてだけでなく、園生活の色々な場面で活用できるように工夫をしました。例えば、フタ



VOICE

「底に指をかけて持ち上げやすい形にしました。本体の柔軟性とともに、是非実際にお手に取られてお確かめください。」(開発担当者)



に折り紙や園児の作品などを入れてきれいに積むことができます。他にもお絵かき(右頁参照)のときは、バケツやおしぼりを置くトレーとしても活躍。よく使われるA4サイズの使用紙もびったり入ります。
ねんどケースは、本体とフタの中央を膨らませて深さをもたせ、コンパクトながらもねんどべらを中に収納することもできます。新学期用品で人気の立本倫子さんのかわいいイラストが描かれて、どうぐケースにもスッキリ収まります。

ねんどケース(おさんほくま)

16.5×9.2×高さ5.2cm 330円(税込)



チューブの先は細口なので、少しずつ量を調整しながら出せます。



ケース本体に装着されたゴム掛けでフタを固定。



バレットのコーナー部分に丸みを付けて洗いがすく。



VOICE

「これまでお絵描きは園備品のポスターカラーを使っていたのですが、今回子どもたちは初めて自分で色を混ぜ合わせる体験をして楽しかったようです。」(園長先生)

ワンタッチえのく8色セット

17.8×11×3.5cm 1,000円(税込)



先生も園児も安心!
やわらかく割れにくいケースです。
— どうぐケースくま／ねんどケース(おさんほくま) —

母の穏やかな表情がとても安心感を与え、見る人すべてに慈愛を感じさせる、北村西望先生の作品の中でも最も暖かい作品と言えます。



子どもたちが心豊かで 健やかに育つ環境を

故・北村西望先生の彫刻作品をはじめ、童画、絵画、リトグラフなど
芸術性の高い作品を全国の子どもたちに届けたい—
そんな思いから、ジャクエツの文化事業はスタートしました。

存在することによって効果のある教材

ジャクエツは大正5年の創業以来、長年に渡り、幼児教育に携わって参りました。そのなかで、ハサミやクレヨンのような消耗して効果が見える教材と同時に、存在することによって教育効果のある教材があると考えようになりました。

より文化的で教育的に優れた、本物に触れる環境は、人間の資質を育む上でとても大切なことではないだろうか。—それが、ジャクエツ文化事業を立ち上げた理由です。

本物に触れて育つ人間力

昭和58年、文化勲章を受章され、日本の美術界を代表する彫刻家、北村西望先生と弊社代表が出会うご縁がありました。100歳を超えてもなお、かくしゃくと芸術に全身全霊を打ち込んで

おられる先生の姿と、その魂みなぎる作品に多くの感銘を受けた代表は、この感動を多くの子どもたちに伝えたいと、少年少女をモチーフにした北村先生の彫刻作品をはじめ、さまざまな芸術品を子どもたちのもとに届けてまいりました。21世紀を担っていく子どもたちを、豊かな人間性を持った人として育てていくために、幼いときから、本物の芸術品に接することのできる環境づくりはとても大切だと思います。

洗練されたすばらしい作品に身近に触れ、感じながら成長することは、その子の人間力を育むことにつながると信じています。



北村西望先生が、子どもたちにすくすく育って欲しいという願いを込めて制作された、男の子と女の子をモチーフにしたジャクエツオリジナル作品です。



北村西望先生(1884~1987)は、日本を代表する彫刻家。代表作の「長崎平和記念像」は世界的に有名。文化勲章受章など多くの功績を残し、亡くなるまで精力的に作品制作を続けた。写真は、妻わら帽子をかぶった男の子の像を制作中の北村先生。



優れた芸術家の作品を、
子どもたちの生活環境へ。
見て、触れて、感じながら、
子どもたちの心は、
大きく羽を広げます。
彫刻、絵画のある、
園の風景を訪ねてみました。

文化作品の ある風景

上智厚生館保育園様

**かわいい少女が
やさしく微笑む、
笑顔あふれる保育園**

ガタンゴトンと路面電車の響きが耳に心地よい、人情いっぱいの街、東京都荒川区町屋。ここに、子どもたちの明るい声があふれる、上智厚生館保育園があります。

正門のそばで口に手をあてクスクス笑う少女の像が、毎日園児たちをお迎えしてくれます。北村西望先生が手掛けたかわいらしい少女の彫刻を園児たちは大好き。

少女の像を設置する台座には、本園のロゴガンである「太陽のように明るくやさしくお花のようにきれいな心いつもここにこ笑顔であいさつ」の文言が刻まれています。

「園児たちがこの少女のように、いつも明るくニコニコ笑顔で過ごしてほしいという思いをこめて、設置しました」と微笑む、渡辺とし子理事長先生。

子どもと美術作品の関係について、渡辺理事長は「小さいころから本物の作品に触れることは、とても大切な経験です。日々、子どもたちの感性や想像力が豊かに育まれているのを感じます」と語ります。

園内には、少女像のほかにも多くの彫刻や絵画があり、園児たちは毎日の生活で友だちのように美術品と親しんでいます。

やわらかい乗り物シリーズ新登場!

ラバービークル

- ポイント1 やわらかい素材なので安心して遊べます!
- ポイント2 鮮やかな発色で子どもたちの目にも映りやすい!
- ポイント3 可動部があるので転がしたり動かして遊べます!



ラバービークル/¥31,500(税込) 全8種・計8個セット 収納ケース付

ジャクエツ
www.jakuetsu.co.jp